

圖版要項

一 北宋修武窯綠釉彫花文大花瓶 (原色刷)

口徑一七・八糎(五寸九分) 胴徑二三・七糎(七寸八分)
底徑一五・三糎(五寸一分) 高 五四・五糎(一尺八寸)

二 北宋修武窯白地黑搔落蓮花文瓶

高 二二・五糎(七寸四分四厘) 米國 フリヤー美術館藏

三 修武窯白磁小壺(上) 共蓋付 東京 荻田朝雄氏藏

高 六・八糎(二寸三分)

同 黑地飛白文小壺(下) 米國 マイヤー氏藏

高 約一〇糎(三寸三分)

四 同 白磁黑地唐草文瓶(上)

高 四一・二糎(一尺三寸六分) 米國 クリーブランド美術館藏

同 白磁牡丹唐草象嵌文托(下)

徑 二二糎(六寸九分)

五 同 白搔落黑象嵌牡丹唐草文瓶(右)

米國 フォッグ美術館藏

高 四一・二糎(一尺三寸六分)

同 白搔落牡丹唐草文瓶 米國 ハウゲ氏藏

高 三二・一糎(一尺〇寸六分)

圖版要項

六 修武窯白地黑搔落牡丹文瓶(右) 東京 細川護立氏藏

高 四〇糎(一尺三寸二分)

同 白地黑搔落牡丹唐草文瓶(左)

京都 恩賜京都博物館藏

高 三一・〇糎(一尺二分)

七 修武窯と推定される陶片 一

1-4 定窯風の白磁
5-7 均窯風の陶片

修武窯と推定される陶片 二

1-3 練上手
4 墨流風の化粧した陶片
5 白盛の上に褐釉をかけたもの
6 黒釉柿堆線文
7 白搔落手に鉛釉をかけたもの
8 白搔落手に緑釉をかけたもの
9 元三彩陶片
10 黒地縁線陶片

八 修武窯と推定される陶片 三

白搔落手

修武窯と推定される陶片 四

白地黑搔落手

九・一〇 梁楷筆李白吟行圖 及部分原寸 東京 繭山順吉氏藏

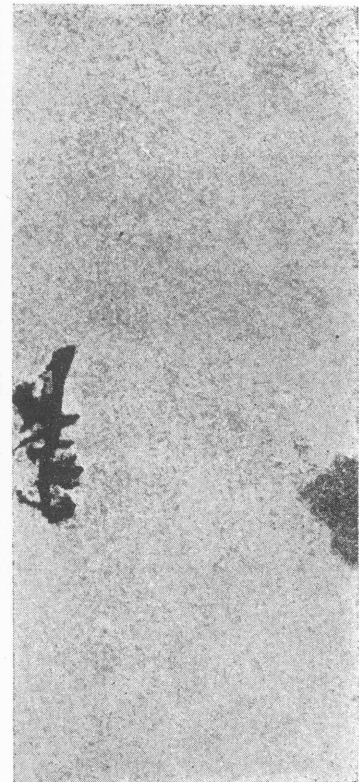
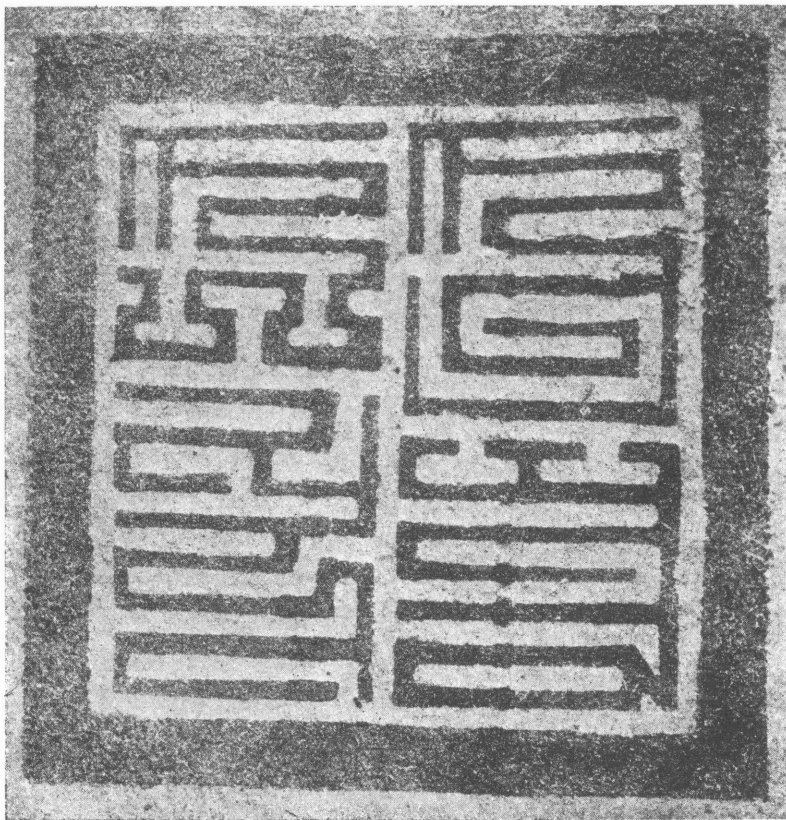
紙本墨畫 縦 八〇・九糎(二尺六寸七分)
横 三〇・三糎(一尺) 尺)

松平不昧公所藏として世に知られたこの圖の中國繪畫史上のあり方については、本誌所載の島田氏論文を参照されたく、以下はその詳細についての多少の

補足にすぎない。

本誌一三四號所載の出山釋迦圖、同一四九號の布袋圖に加へて、酒井家舊藏六祖截竹圖が、一應梁楷畫道釋として白描畫系であるのに比すれば、これは逸格の水墨畫系の作品、潤ひに富んだ、濃淡の滲みを效果的に驅使した作域は、おなじく梁楷畫と傳稱される伊達家舊藏普化禪師圖の如きものに近い。しかし彼の如く衣文をつけたての墨暈によつて處理するまでに至らず、主として淡墨で太く刷いた衣文の線的な表現には、一應白描畫的なものを含むとも云へよう。

梁楷畫の振幅を白描畫的なものにして一方前述普化禪師圖の如き水墨畫的なものを假定しうるとすれば、この圖はその兩極の間にあつて、やゝ水墨的なものに偏して位置する、と云ひ得るであらう。一旦に襟の淡墨線を引いて、慘みを残して止め、更にやや濃く太い筆致を以て追ひ、上方の線の止めに及んで、筆を返へして、脊筋へと引く。この襟元の中墨の溜りを破つて、おそらく兩度、背後の輪廓をなす衣文の筆觸を繰返す。これらの衣文への指向の線を繼いで、衣文の淡墨線が下方に斷續する。その斷續する衣文を承けて、續いて渴筆調のくの字形の筆致があり、その上を淡墨の太い筆で破り、しかもその線は太く長く一氣に右上へはね上げて、前方襟元から外隈に輪廓を付けて來る筆致を承けてゐる。この二つの筆致で長い袖の軽く動勢を捉へて餘すところなく、これに加へて同様な手法の裾の線とその止めのおそらく右から左への楔形の筆致、更に焦墨の左右の杳の指示で、像主の歩む進行形の表現は完全と云ふべきであらう。焦墨の髻を中心に渴筆を以て毛描し、おなじく毛描きとして髭、髻を處理し、また額と鼻に際立つた角を示す顔の輪廓線も、衣文とは異つた直線的な筆致であり、ただ耳のみ曲線的に處置してゐる。この衣文との筆致の相違に島田氏のいはゆる逸格の畫風を認められると同時に、面貌の單純と見ゆる直線的な筆致は、他の梁楷畫に比してこの圖の特色をなすものでもある。しかも衣文の筆致にあつても前述裾前方の楔形の筆致、外隈で描かれた前身の衣文の



梁楷筆 李白吟行圖落款及鑑藏印記(原寸)

中程の角張つた突出に相關性を見るところである。かうしてやゝ仰ぐ顔の表情には單純な構成だけにきびしいものが感ぜられ、遠く視點を投けるとともに、この圖の把握する空間の潤さが展けられてゐる。

ここに、梁楷畫を李龍眠、賈師古系の白描畫とするところに加へて、南宋畫院にあつては従前見えない水墨畫的要素を吸収して、自家藥籠中のものとした時代として當然の結果であつたものを認めなければならない。この簡潔な手法、犀利な洞察などは秀れた梁楷自身の畫家としての個性に歸せられながら、自ら梁楷をしておなじく水墨畫としても、牧谿の潤澤な中墨仕立の手法、リアルな取材に對して技術の洗煉、取材の古典性或はアカデミズムよりして高踏的な立場を固執すると云ふべきものがある。孤高と云ふべきか、潔癖と云ふべきか、或はきびしいと云ふべき梁楷の畫境がここに展開されてゐる。梁楷と同時に代人である居簡が、その「北澗外集」卷四に五山版。久原文庫本による。

贈 御前梁宮幹

梁楷惜墨如惜金、醉來亦復成漓淋、天籟自響或自瘖、檢史閣筆空沈吟、前日去尋子趙子、道院水亭秋色裏、幻成趙子騎蹇驢、涼酒不減騎鯨魚、又寫深衣跨牛客、雲生谷口耕阡陌、按圖絕叫喜欲飛、掉筆授我使我題、我方挂眼孤山西、岑樓殘碧澹掃眉、見成一段詩中畫、宜雨宜晴四時挂、輸與滕王畫蠅圖、坐收少室山人賈

と記し、墨を惜むこと金を惜むやうだとの句に、梁楷の簡潔なきびしい手法、史を檢し筆をおいて空しく沈吟との句に、その取材構想への努力が知られ、以下その描いた道釋畫の形容を叙してゐるところに、梁楷畫の輪廓が描かれる。

この記述が御前梁宮幹とし、しかも墨を惜しむ一句、彼的水墨畫を想はせて充分であることは、必しもかの出山釋迦圖の如きもののみが梁楷の院人としての製作であり、水墨畫風のものゝ畫院を去つて後の製作と解釋し得ないことともならう。

數すくない梁楷現存作品の款識からすれば、この圖の自署の如き、楷字に多少の缺損はあるが、明確な結體で、布袋圖の花押風に定型的になつた自署よりも出山釋迦圖のそれに近いものである。この關係は、布袋圖が寶祐元年一二三三寂の大川普濟贊を伴ふ故に梁楷晩年の製作とし、一方嘉泰年間一二〇一—一二〇四待詔時代と「御前圖書梁楷」と款識ある出山釋迦圖とを結付けることを許されるとすれば、この李白圖もまた比較的早い時代に屬するものといふ。この圖がその完成度に於いて布袋圖に及ばないが、潤ひある水墨畫調に若さがあり、また摸索する試み、それだけに緊迫した感に代へて含みある畫境と印象付けられる。ともあれ梁楷畫の振幅で、一方の極點に近いものとすると同時に、年代的にはその延長上の起點に近い位置にあつて、梁楷の過渡的な時期の製作とも想像されるところである。

圖上に捺された鑑藏印記は漢字としては解讀し難く、八思巴文字の篆文化と推定されてゐるが、その文については未詳であり、大方の示教を仰ぐものである。なほこの印文を八思巴文字とすれば、その使用は元朝初期に限定され、同様の結體である一印記が靜嘉堂所藏の宋刊蜀大字本周禮第九に押されてゐるのを寓目したが、付記して参考に資したい。(熊谷)